

令和7年度佐世保市『赤ちゃんふれあい(いのちを育む)事業』アンケート調査に関する報告書

門田 理世 (西南学院大学大学院)

江田 菜穂子(西南学院大学大学院生・宮崎学園短期大学)

増田 吹子 (西南学院大学大学院生・尚絅大学) 土田 珠紀(西南学院早緑子供の園)

中ノ子 寿子(西南学院大学大学院生・尚絅大学短期大学部)

佐世保市幼児教育センター

調査結果概要【本文中の参照箇所】

1. 赤ちゃんの保護者は本事業の意義を多面的に捉え、本事業の拡大を望んでいる。
 - 赤ちゃんの保護者92.6%が本事業の拡大を望んでいる。【p.4】
 - 赤ちゃんの保護者は、本事業を小学生にとっての学びや育ちに貢献する取り組みとして評価するだけでなく、昨今の少子化や核家族化、地域コミュニティの希薄化などの社会的な問題に対しても一定の意味を有するものとして捉えている。【p.4】
2. 赤ちゃんとふれあう直接的な経験が、小学生の赤ちゃんのイメージを変化させている。
 - 事業に参加する前の小学生は、赤ちゃんを未熟で能力が足りない存在として捉えていたが、赤ちゃんとふれあった後にはそのようなイメージが薄れることが明らかとなった。【p.5】
 - 事業後は赤ちゃんの実態に迫ったイメージ語が出てきていることから、ふれあうことを通して得られる視覚的な情報は、赤ちゃんのイメージを具体化する契機となっている。【p.5】
 - 実際のふれあいを通して赤ちゃんの多様な姿を目にしたことにより、赤ちゃんに対する理解が深まった結果として、赤ちゃんの様子から赤ちゃんの気持ちを推察する回答が見られた。【p.6】
3. 小学生は子育てに対して「大変」というイメージをもっていた。さらにその詳細な内容は、個人あるいは学年により違いが見られる。
 - 事業の経験の有無に関わらず、子育てにおいて“赤ちゃんの世話”が大変だというイメージをもっているが、大変な中に楽しさもあると考えている小学生がいることが明らかとなった。【p.7】
 - 子育てのイメージが「大変」であることは5年生・6年生共通の印象であるが、6年生では時間的な側面や経済的な側面から子育てを捉えていた。このことは、同じ経験をしていても年齢や経験によって受け止め方や認識が異なる可能性を示唆している。【p.9】

調査結果より得られた佐世保市への提言【本文中の参照箇所】

1. 事業の継続
 - 本事業で小学生が赤ちゃんと実際にふれあうことは、小学生にとって赤ちゃんのイメージの具体化や子育てのイメージの深化につながった。また、同じ経験をしていても年齢や経験によって受け止め方や認識が異なる可能性が示唆されたことから、小学5年生と6年生という年齢は、1年の差であっても様々な経験を通して、考え方や価値観が変わっていく時期であると推察される。そのような時期に、本事業のような直接的な体験をすることは、小学生の考え方や価値観を構築していくうえでの一つの契機となる可能性がある。本事業が小学生にとってどのような意味をもたらすのかについて、今後も継続して調査を行っていく必要があるだろう。【p.9】
2. 事業の拡大
 - 本事業は、小学生にとっては赤ちゃんと実際にふれあう機会や子育てへの理解を深める機会を、赤ちゃんとその保護者には地域とのつながりや自分たち親子の価値を感じる機会をもたらしており、これらの効果はこれまでの調査でもほぼ同様の傾向が確認されている。こうした成果は、幼児教育センター職員や小学校教員などの関係者が、事業の計画から振り返りまでの各段階でそれぞれの専門性を発揮し、継続的に努力を注いできたことに支えられている。今後事業を拡大していくためには、蓄積された調査データを基に、事業の実施に必要な要件を整理し、地域や担当者を問わず運用できる持続可能な体制を整えることが重要である。【p.10】

I. はじめに

佐世保市は平成27年度より、佐世保市幼児教育センターにおいて『赤ちゃんふれあい(いのちを育む)事業』(以下、『赤ちゃん事業』)を実施している。本事業は子育て支援啓発事業の一環として、参加する保護者が①親としての喜びを感じる、②自分の子育てを振り返る、③自分の子どもの成長や将来をイメージする、④小学生と関わることで地域の一員としての存在を意識することを目的とする。また、参加する小学校の児童(以下、小学生)にとっては、本事業が①命の大切さ・尊さ・不思議さを感じる、②相手を思いやる気持ちを抱く、③自分の家族(親)との関係を考えるきっかけとなる、④親の思いを知る、⑤将来の子育てを体験する機会となることを期待している。佐世保市教育委員会は、毎年6月を「いのちかがやく強調月間」と定めており、本事業はその取り組みにも寄与するものである。

本事業はこれまで佐世保市幼児教育センター近隣の限られた小学校区で開催されてきたが、西南学院大学大学院門田研究室(研究代表:門田理世)と佐世保市幼児教育センターの共同調査研究によって事業の効果と意義がデータから実証されてきたこと、事業に参加した保護者から、この事業の継続と拡大を要望する声が毎年あがっていること、そして小学校や中学校から事業参加の申し出が増加してきたことなどを受け、今後は佐世保市全域に事業を拡大していくこととなった。その事業拡大に伴い、『赤ちゃん事業』で交流をした小学生・赤ちゃん・赤ちゃんの保護者が約半年後に再度ふれあう『おおきくなったね』事業は終了し、昨年度から『赤ちゃん事業』のみの実施となっている。したがって本報告書では、6月と11月に計5回にわたって実施された『赤ちゃん事業』に参加した赤ちゃんの保護者と小学生、それぞれの立場から事業の意義を検証した結果を報告する。

II. 調査の概要と分析手法

1. 事業の概要と分析対象

今年度の『赤ちゃん事業』(以下、事業)は、6月に3回、11月に2回、合計5回実施された。まず、以下に参加者数の概要を述べる。事業への参加は、6月の赤ちゃんは延べ48名、赤ちゃんの保護者は延べ49名(夫婦での参加が1組)、小学生が103名で、11月の赤ちゃんは延べ30名、赤ちゃんの保護者は延べ32名(夫婦での参加が2組)、小学生は76名であった。よって、6月・11月の参加者の合計は赤ちゃんが延べ78名、赤ちゃんの保護者が延べ81名(内、延べ3組が夫婦で参加)、小学生が179名(5年生113名、6年生66名)となった(表1)。

赤ちゃんの保護者の参加契機は多様であり、日頃から幼児教育センター内の子育て支援センター(きらきら広場)を利用して職員から事業への参加を打診された場合もあれば、他の支援センターから事業に関する紹介を受けて参加したり、事業に関する取り組み・報告書が載ったホームページを見て自分から参加を申し込んだりした場合などがある。小学校は、昨年度より5校の参加となっている。小学校の事業への参加経緯も多様で、過去事業に参加したことのある学校に幼児教育センターから連絡をして参加を呼び掛ける場合もあれば、小学校側から参加を希望して幼児教育センターに申し出がある場合もあった。

小学生は、事業で赤ちゃんやその保護者と交流をする前に、担任・養護教諭による講話や妊婦の方の体験談の紹介、赤ちゃん人形を使った抱っこ練習などの授業を通して、胎児期のことや、生後の成長発達、赤ちゃんとおふれあう際に気を付けることについて事前学習をしている。

事業当日は、小学生5～8名と親子2～3組が1グループ

表1. 『赤ちゃん事業』の参加者概要

| 日時 | 参加者数 | |
|-------------------------|-----------------|---|
| | 親子数 | 小学生数 |
| 6/9(月) 10:00～10:45 | 18組 (夫婦参加1組) | 潮見小学校 6年1組(28名) 6年3組(1名) |
| 6/16(月) 9:40～10:25 | 15組 | 木風小学校 6年1組(17名) 6年2組(18名) 6年5組(2名) |
| 6/20(金) 10:35～11:20 | 15組 | 港小学校 5年1組(19名) 5年2組(18名) |
| 11/7(金) 10:00～10:45 | 18組 (夫婦参加1組) | 白南風小学校 5年生(34名) |
| 11/21(金) 10:20～11:05 | 12組 (夫婦参加1組) | 天神小学校 5年1組(20名) 5年2組(22名) |
| | 合計 78組 | 合計 179名 |

となり、小学生が赤ちゃん(おおむね2か月～1歳5か月)の遊ぶ様子を観察しながら、保護者から子育てや赤ちゃんについての話を聞く形で交流が行われ、小学生が玩具で赤ちゃんをあやす、赤ちゃんを抱っこする、絵本を読み聞かせるなどの場面もあった。また、本事業は佐世保市幼児教育センターが運営しており、交流ではセンター職員や地域ボランティアスタッフがファシリテーターとして小学生と保護者をつなぐ役割を担っている。

事業に参加した保護者、小学生に事業前後でアンケート調査を実施した(質問項目は本報告書末参照)。事業に参加し、かつ事業前・事業後アンケートが揃っている保護者81名(6月49名/11月32名)と小学生168名(6月102名/11月66名)のデータを分析の対象とする。なお、保護者は複数回事業に参加してアンケートを書いている場合がある。

2.分析の方法

アンケートの中で選択肢による回答は、それぞれの回答の数や全体に占める割合の算出をした。また、自由記述による回答は、意味内容ごとに区切ってコードを付し、抽象度がより高いコード・カテゴリに分類していく質的分析¹⁾と、テキストマイニングソフトKH Coder²⁾を用いた分析を行った。なお、アンケート本文の質問及び選択肢を《 》、原文の回答を「 」で示している。

Ⅲ. 調査結果及び考察

1.アンケート回答者の属性

【保護者について】

赤ちゃん事業に参加した赤ちゃんの保護者は、30代が最も多かった(表2)。今年度の参加者は、61名が母親、3名が父親である(無回答17名)。参加した赤ちゃんは第1子が38名、第2子が32名、第3子6名、第4子4名、第5子1名で、全体における割合は図1のようになった。今回参加した保護者の53.0%が兄姉児の子育て経験があり、46.9%が初めての子育て中ということになる。

《日頃、小学生とふれあう機会があるか》という問いに対し、《ある》と回答した人が47名、《ない》と回答した人が34名で、半数以上の保護者に日頃から小学生とふれあう機会がある。今年度の事業に参加した赤ちゃんは半数以上が第2子以降であり、上のきょうだい児が小学生で日頃からふれあっているという回答も多く見受けられた。

《子育てに対する不安や気になっていること》は、《ある》が12名、《少しある》が22名で、34名の保護者が育児への不安を抱えており、この内、第1子の赤ちゃんを育てている保護者は16名(不安を感じている親の47.1%)、第2子の赤ちゃんを育てている保護者は18名(不安を感じている親の52.9%)であった。不安の内容は、「初めての子育てでわからないことが多く、急なけがや体調不良が心配」といった第1子の保護者の悩みと、「年子育児が大変」「上の子のイヤイヤ期の対応」といった第2子の保護者の悩みであった。

【小学生について】

アンケートの回答者は、6月が102名(男児54名/女児44名/無回答1名/回答しない1名/回答不備2名)で、11月は66名(男児36名/女児30名)、合計168名である。5年生と6年生の割合は、5年生が102名(6月36名/11月66名)、6年生が66名(6月66名/11月0名)で、約6割が5年生であった。

また、《これまでに赤ちゃんとのふれあう機会があったか》という問いに対して、《ある》が121名(参加者の72.0%)であり、約7割の小学生が事業以前に赤ちゃんとのふれあいを体験している。ただし、ふれあう対象との関係については、「自分のいもうとが赤ちゃんで毎日あやしたり、だっこなどしている」という日常的な関わりをもっている場合もあれば、「友だちの赤ちゃんをさわった」という非日常的な経験や「弟や妹が赤ちゃんだった時」といった自身も幼いころの経験の場合も

表2. 「赤ちゃんふれあい事業」に参加した保護者の年齢(延べ数)

| 保護者の年齢 | 人数 |
|--------|----|
| 20代 | 19 |
| 30代 | 54 |
| 40代 | 8 |
| 合計 | 81 |

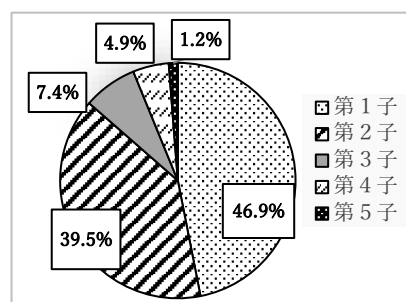


図1. 「赤ちゃんふれあい事業」に参加した赤ちゃんの出生順位

あり、関わりの頻度や経験している内容、経験している時期には違いがあった。

2. 保護者アンケートの結果及び考察

赤ちゃん事業に参加した保護者を対象に行ったアンケート調査で、本事業の今後の展望を探るために、「本事業を佐世保市全域に広げていった方がよいか」という質問をした。その結果、81名中75名(92.6%)が「広げてほしい」と回答している。それらの理由を分析した結果、14のオープン・コード、7の焦点コード、3のカテゴリに集約された(表3)。以下、オープン・コードを< >、焦点コードを[]、カテゴリを[]で表す。

具体的には、[小学生が赤ちゃんと直接ふれあう意義]を尊重するものや、[小学生の学びや育ちへの貢献]に期待する回答が多く見られた。そして、「座学ではなく実際にふれあうこと」「生でふれあうこと」など、実体験そのものの価値を重視していることが分かった。さらにそのふれあいによって、<小学生に優しい思いやりの気持ちが育つから>など[小学生の心の育ちにつながる]ことや、<小学生が命について考える機会となるから>など[小学生が命を大切に思う機会となる]と感じており、保護者は[小学生の学びや育ちへの貢献]に意義を見出していることが明らかとなった。

また、小学生にとってだけでなく小学生の学習の役に立てることがうれしいから>など、本事業を通して自分たち親々の存在価値を実感でき、双方ともに意味があることと、相互的な意義を感じている保護者もいることが明らかとなった。さらに保護者は、[地域がつながる機会である]と、地域における他者とのつながりの機会としても有用であると感じていた。

以上のことから参加した保護者は、本事業が佐世保市全域に広がることにより、小学生が赤ちゃんとふれあう実体験、学びや育ちへの意義に加え、昨今の少子化や核家族化、地域コミュニティーの希薄化などの社会的な問題に対しても意味があることと捉えているといえる。

表3. 「赤ちゃんふれあい事業を佐世保市全域に広げたい理由」

| カテゴリ | 焦点コード | オープン・コード |
|--|--|--|
| 小学生が赤ちゃん と直接ふれあう意義(33) | 小学生が赤ちゃん と直接ふれあうことが 稀少な機会である(20) | 直接赤ちゃん とふれあうことが 小学生の学び となるから(11) |
| | | 核家族化や少子化 の中、貴重な ふれあいの 機会だから(9) |
| | 誰もが事業を 体験できる ことを期待 する(13) | 小学生にと ってよい 経験とな るから(11) 我が子に も体験し てほしい から(2) |
| 小学生の学び や育ちへの 貢献(21) | 小学生の心の 育ちにつな がる(8) | 小学生に優 しい思い やりの気 持ちが育 つから(7) 小学生の 心が豊か になる から(1) |
| | 小学生が命 を大切に 思う機会 となる(7) | 小学生が 命につ いて考 える機 会とな るから (4) |
| | | 小学生が 命の大 切さを 知る機 会とな るから (3) |
| | 小学生が子 育てに 関わる ことで よい影 響があ る(6) | 小学生に 子育て への理 解が深 まる から(4) 小学生 が赤 ちゃん や子 育て に関 わる よい 機 会だ から (2) |
| 自分の子 育てや 地域に とって の意味 (11) | 小学生との ふれあ いによ り自分 自身が 喜びを 感じる (8) | 小学生の 学習に 役に 立て ること がうれ しい から (4) |
| | | 小学生 との ふれ あ い が保 護者 にと って よい 経験 とな る から (4) |
| | 地域が つな がる 機 会 だ ら う (3) | 地域の つな がり が広 がる から (2) 赤 ちゃん 同 士 が 交 流 で き る から (1) |

3. 小学生アンケートの結果及び考察

(1) 小学生の赤ちゃんに対するイメージの変化

ここでは、赤ちゃんや赤ちゃんの保護者とのふれあいが小学生に与える影響を明らかにするため、事業の前と後で、「赤ちゃんと聞いて思い浮かべる語」がどのように変化したかを考察する。

はじめに、「赤ちゃんと聞いて思い浮かべる語」の回答数の変化に着目した。事業前と事業後でのイメージ語をそれぞ

れ集計したところ、9個の回答欄に対し、いずれも回答数の平均は5~6個であり、大きな差は見受けられなかった。

次に、事業で赤ちゃんとふれあう実体験を経て、赤ちゃんをイメージする語が小学生の中でどのように変化したかを、事業前後におけるイメージ語を比較することによって検証する。そのため、テキストマイニングソフトKH coder (Ver.3)を用いて分析することとした。このソフトを用いた理由は、テキストデータを計量的手法によって解析し、データの全体像や概観を描くのに適しているためである。なお、KH coderによる分析の結果は、ソフトの設定によって切り出された語を〔〕で、本文を「」で、ソフトによって切り出された原文回答中の該当箇所を下線で示している。

まず、小学生が事業の前と後に《赤ちゃんと聞いて思い浮かべる語》として回答した語の出現回数を比較した(表4)。この結果から分かるように、赤ちゃんをイメージする語として多くあがる言葉は、事業前後を通して最も多いのが[かわいい]、次いでそれぞれ[小さい]と[泣く]であった。ここから、小学生は事業を経験する前後で変わらず赤ちゃんに対して[かわいい][小さい][泣く]のイメージを不変的にもっているといえる。

次に、事業前と事業後で赤ちゃんのイメージ語の出現回数に違いがあるものとして、[~ない] (否定助動詞)に着目する。この語は、事業前には出現回数が43回、頻出順位6位であったが、事業後には出現回数15回、頻出順位21位に減少している。否定助動詞[~ない]が出現した自由記述の詳細を見ると、「まだ何もできない」「歩けない」「言葉が分からない」など、赤ちゃんの「できないこと」に注目している回答が見られた。このことから、小学生は赤ちゃんを「様々なことができない未熟な存在」として認識していたが、事業で実際に赤ちゃんとふれあうことを通して、その認識が薄れたことが示唆される。

一方、事業後に赤ちゃんをイメージする語として回答数が顕著に増えたものは[笑う]と[よだれ]である。[笑う]は、事業前には出現回数11回であったが、事業後には出現回数が32回に増え、頻出順位8位となっている。また、[よだれ]は、事業前の出現回数12回に対し、事業後は31回に増加し、頻出順位9位となっている。事業で実際に赤ちゃんとふれあった小学生にとって、赤ちゃんが笑うことや、赤ちゃんの口からよだれが出ていたことが印象的だったことが窺える。このことから、日常的に赤ちゃんとふれあう機会が限られている小学生にとって、実際に赤ちゃんと対面し、ふれあうことを通して得られる視覚的情報は、赤ちゃんを「生きた存在」として捉えたからこそ強い印象を与えるといえる。このような直接的な経験は、赤ちゃんに関するイメージの構築にそのまま作用する可能性が高い。

事業前と後を比較して赤ちゃんのイメージとして用いられる特徴的な語を特定するために、対応分析(コレスポンデンス分析)を行った。対応分析は、特定の変数で出現パターンが似通った語を二次元の散布図で視覚的に示すことができるものである。事業前と事業後を変数として分析にかけたところ、図2のような散布図が得られた。なお、図2の中で太枠の四角で囲っている語は、考察に用いた語である。

図2は、中心にある原点から右上に配置されている語ほど事業前に特徴的な語であり、左下に配置されている語ほど事業後に特徴的な語であると解釈する。事業前には[へそのお][たいばん][子宮]といった赤ちゃんに関係する知識を表す語があがっていることが特徴的であり、学校での授業の学習内容がそのまま「赤ちゃんのイメージ」となっていることが推察される。それに対して、赤ちゃんとふれあった後には、[重い][もちもち][やわらかい]といった赤ちゃんの重さや柔らかさに関する語が特徴的な語としてあがってきている。事業後におけるこの特徴は昨年度と同様であり、小学生にとって事業で赤ちゃんとふれあうことは、赤ちゃんの実態に近づくことにつながるといえよう。また、事業後には、「何でも口に入れる」「おもちゃをなめる」という回答に見られる[入れる][なめる]や[あばれる]が特徴語としてあげられており、実際に赤ちゃんが動いている様子を見た際に得られた視覚的な情報がイメージとして結びついていることが分かる。

表4. 事業前後の赤ちゃんに対するイメージ上位10語

| 事業前 | | 事業後 | |
|-------|------|------|------|
| 抽出語 | 出現回数 | 抽出語 | 出現回数 |
| かわいい | 153 | かわいい | 151 |
| 小さい | 126 | 泣く | 113 |
| 泣く | 76 | 小さい | 99 |
| ハイハイ | 45 | ミルク | 51 |
| ミルク | 45 | おもちゃ | 43 |
| ない | 43 | ハイハイ | 39 |
| 寝る | 43 | 寝る | 33 |
| すぐ | 38 | 笑う | 32 |
| する | 37 | よだれ | 31 |
| おしゃぶり | 17 | だっこ | 27 |

さらに、「おもちゃが大好き」「お母さんが大好き」などの回答に見られる[大好き]、「だっこが好き」「お母さんが好き」などの回答に見られる[好き]が特徴語としてあがっていることから、小学生は[あばれる][入れる][なめる]といった視覚的に捉えられる情報のみにとどまらず、「おもちゃが大好き」「お母さんが好き」といった赤ちゃんの気持ちについても推察していた。このような赤ちゃんの気持ちを推察する行為は、実際のふれあいを通して赤ちゃんの多様な姿を目にしたことにより、赤ちゃんに対する理解が深まった結果として生じられたと考えられる。

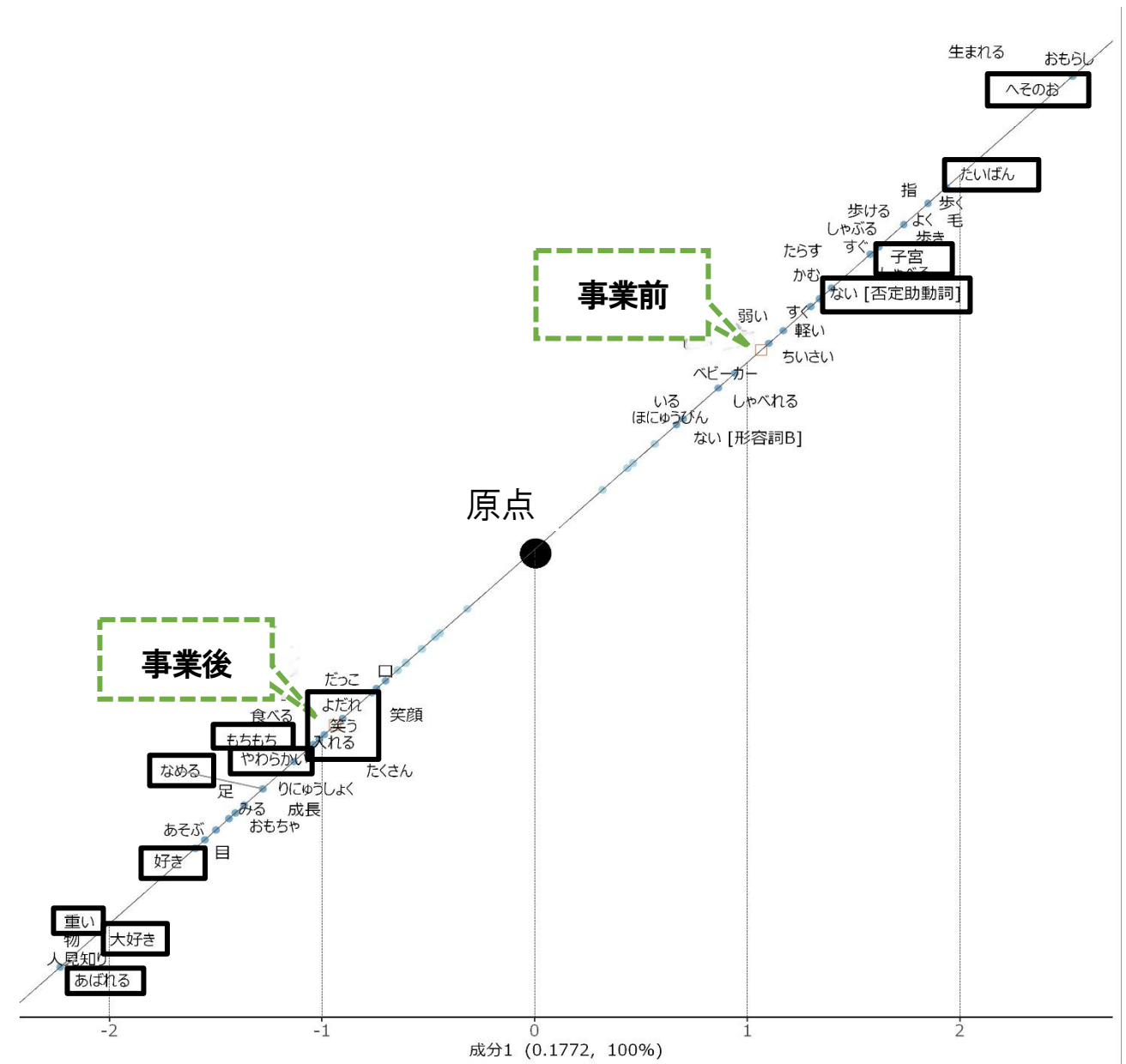


図2. 小学生の赤ちゃんに対するイメージの事業前後の特徴語

最後に、事業前に特徴的な語として抽出された「何もできない」「歩けない」などの[～ない(否定助動詞)]という語や、「歯がない」「かみのけがない」などの[～ない(形容詞)]という語について見ていく。事業前に抽出されたそれらの特徴的な語からは、赤ちゃんを能力が未発達で未熟な存在として捉えていることが読み取れる。しかし、事業後にはそのような語が特徴的でなくなることが確認された。このことは、赤ちゃん事業への参加経験が、小学生の赤ちゃんに対するイメージを、単なる未完成な存在としてではなく、生命としての重み、柔らかさをもつ存在として変化させる効果があるといえるだろう。つまり、小学生にとって赤ちゃんとの直接的なふれあいが、生命の大切さ、尊さ、重さを実感する契機となったことを意

味している。これは昨年度も同様の結果が出ており、『赤ちゃん事業』がその一義的な目的を果たしているということが明らかになったといえる。

(2) 小学生がもつ子育てに対するイメージ

事業前と後に《子育てにどのようなイメージがあるか》について自由記述による回答を求めたところ、事業前163名(5年生97名、6年生66名)、事業後168名(5年生102名、6年生66名)から回答を得られた。まず、子育てに対する小学生の印象や認識の全体像を明らかにするために、KH coderを用いてどのような語が多く回答されていたかを確認する頻出語リストを作成した表5・6は、頻出語リストの上位10までを抜粋して示したものである。

全てのグループで、最も多く抽出された語は「大変」であり、小学生は子育てを大変なものとして捉えていることが分かった。そこで、小学生がなぜ子育ては大変だというイメージをもっているのか、子育ての何を大変だと考えているのかを明らかにするために、共起ネットワーク図を作成した。共起ネットワーク図は、同じ文書の中で一緒に使われている語を線で結んだネットワーク図であり、単語同士の関連性を視覚的に表現したものである。円の大きさは語の出現頻度の高さを、図中の語と語をつなぐ線は、それらの語が文中で一緒に用いられている、つまり共起関係にあることを示している。なお、表5・6において最頻出語である「大変」及び「大変」と共起関係にある語に太枠と網掛けを、図3～6において考察に用いた語に太枠をつけている。

5年生の共起ネットワーク図では、「大変」と共起関係にある語は、事業前は「ミルク」「お母さん」「だっこ」「思う」「イメージ」(図3)、事業後は「夜泣き」「泣く」「赤ちゃん」「オムツ」である。(図4)。6年生で「大変」と共起関係にある語は、事業前「赤ちゃん」「泣く」「イメージ」「子育て」(図5)、事業後「泣く」「赤ちゃん」「時間」「子育て」であった。(図6)。5年生の事業前で「大変」と共起している「思う」に注目すると、「思う」と同じグループにあるのが「家事」「色々」「食べる」「夜泣き」「オムツ」「風呂」「ご飯」である。また同様に「大変」と共起している「ミルク」に注目すると、「りにゅう食」「作る」と共起している(図3)。これらのことから、5年生事業前には、オムツ替えや離乳食を作ること、お風呂に入れることや夜泣きの対応といったことが大変だというイメージをもっていることが分かる。同様の傾向は、5年生事業後・6年生事業前後にも見られ、また抽出語上位10位の中に「ミルク」「泣く」「オムツ」といった言葉が含まれることから、事業の経験の有無に関わらず、子育てにおいて“赤ちゃんの世話”が大変だというイメージをもっていることが分かる。

また、5年生事前事後、6年生事前で抽出語上位10位以内に「楽しい」という言葉が入っており(表5・6)、上位10位には入っていないが、6年生事後にも共起ネットワーク図に「楽しい」が入っている(図6)。「楽しい」の大半は、学年に関わらず「楽しいこともあればつらいこともある」「夜なきやミルクなどで大変だけど楽しい

表5. 事業前後の子育てに関するイメージ
【5年生】

| 事業前 | | 事業後 | |
|------|------|------|------|
| 抽出語 | 出現頻度 | 抽出語 | 出現頻度 |
| 大変 | 67 | 大変 | 67 |
| 赤ちゃん | 13 | 赤ちゃん | 26 |
| 泣く | 9 | 泣く | 16 |
| イメージ | 8 | 思う | 9 |
| 楽しい | 8 | イメージ | 8 |
| 思う | 8 | ミルク | 8 |
| ミルク | 7 | 夜泣き | 7 |
| だっこ | 6 | オムツ | 6 |
| 子ども | 5 | 楽しい | 5 |
| 食べる | 5 | 子育て | 5 |
| | | 食べる | 5 |
| | | 夜 | 5 |

表6. 事業前後の子育てに関するイメージ
【6年生】

| 事業前 | | 事業後 | |
|------|------|------|------|
| 抽出語 | 出現頻度 | 抽出語 | 出現頻度 |
| 大変 | 42 | 大変 | 27 |
| 泣く | 13 | 赤ちゃん | 21 |
| 子育て | 10 | イメージ | 10 |
| 思う | 10 | 子育て | 9 |
| 赤ちゃん | 9 | 子ども | 8 |
| 作る | 8 | 時間 | 8 |
| イメージ | 7 | オムツ | 6 |
| オムツ | 5 | 育てる | 6 |
| 楽しい | 5 | 泣く | 6 |
| 子ども | 5 | 自分 | 6 |

時もある」「大変で楽しくて、むずかしいというイメージ」といった文に含まれており、子育ては大変な中に楽しさもあると考
 えている小学生がいることが明らかとなった。これは、昨年のアンケート結果と同様である。

(3) 子育てのイメージに関する学年ごとの特徴

各学年の共起ネットワーク図において、5・6年生事業前後を通じて、赤ちゃんの世話に関することや成長を見ることがで
 ける喜びについての記述があることが分かる(図3~6)。そして6年生の事業後には、「一生懸命」という言葉が出現し、
 [親][子ども][育てる][イメージ]と共起している。これは、事業前の回答には見られなかったことであり、事業で実際に
 赤ちゃんや保護者と関わることで、保護者は一生懸命に子どもを育てているということを感じた小学生がいることの証左
 であるといえる。つまり、事業での経験が、親の思いや姿勢に気付く機会になっている可能性がある。赤ちゃんとふれあう
 経験を通して小学生が親の心の有様に思いを馳せるようになってきていることは、小学生の心の育ちにとってよい影響を与え
 る一方で、赤ちゃんの保護者にとっても自分の努力を知ってもらう機会にもなっている。

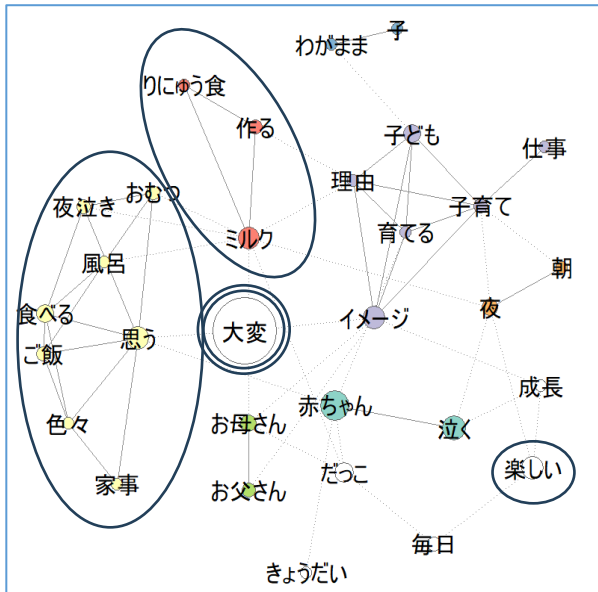


図3. 【5年生 事業前】子育てのイメージ



図4. 【5年生 事業後】子育てのイメージ

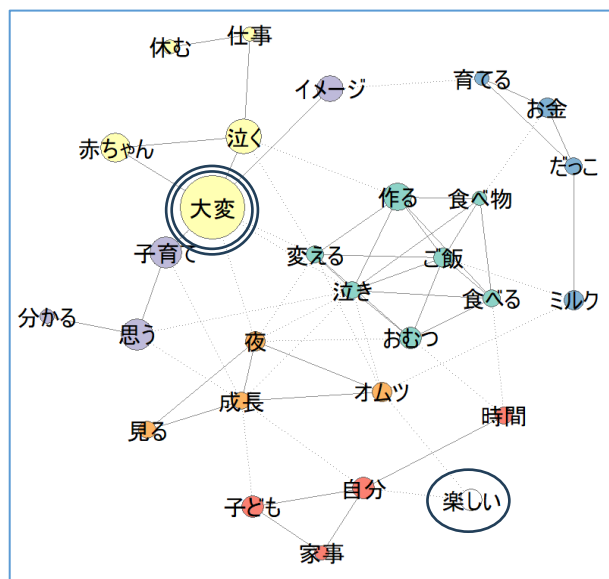


図5. 【6年生 事業前】子育てのイメージ

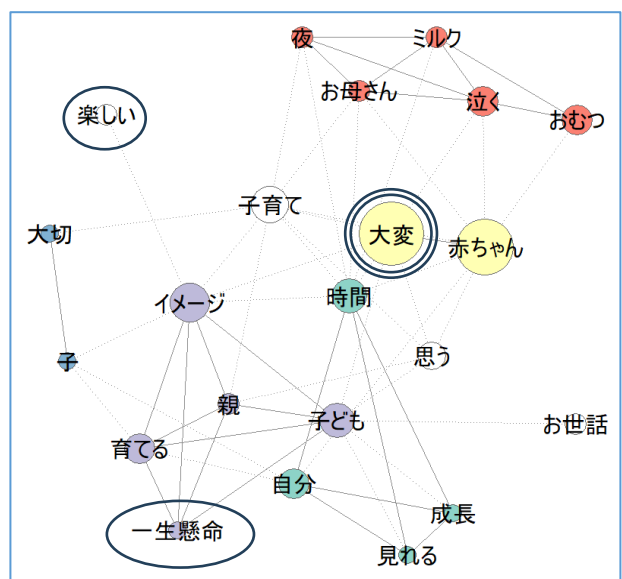


図6. 【6年生 事業後】子育てのイメージ

子育てのイメージに関する学年ごとの特徴を明らかにするため、アンケートに回答した小学生の各学年と回答時期を外部変数として共起ネットワーク図を作成した(図7)。この図から、[食べる][だっこ][夜泣き][遊ぶ]は主に5年生、[ご飯][泣き][成長][変える][お金][作る][お世話][時間][親][育てる]は主に6年生において見られる語であることが分かる。[時間]と[お金]が6年生で見られるのは昨年と同様である。[時間]は「一人の時間がないから大変」「子育ては時間がなくてそがしそうなイメージ」などの文章の中に、[お金]は「お金がかかる」という文章の中に見られる。先述の[一生懸命][親]が6年生でのみ見られたことから、5年生は具体的な赤ちゃんのお世話を子育てとしてイメージする一方で、6年生になると時間的経済的な負担、親の思いなどにも考えが及ぶようになってきていることが分かる。5年生と6年生で違いが見られるのは、それぞれの発達段階が大きな要因の一つと考えられる。

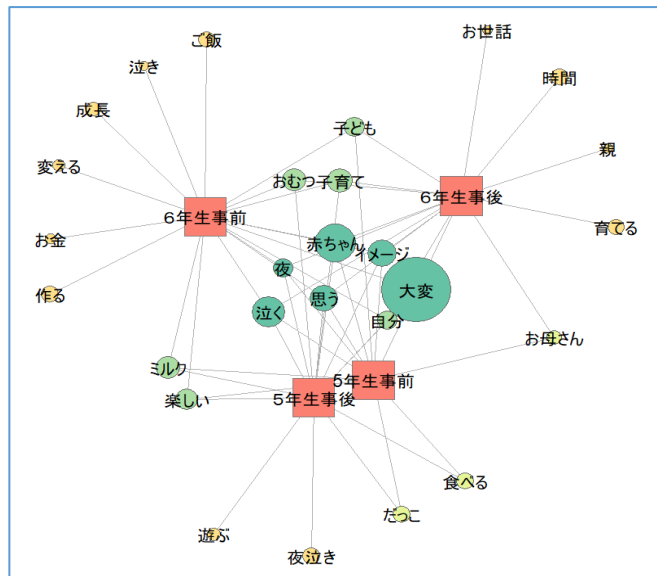


図7.【5・6年生 事業前後】子育てのイメージ

IV.まとめと今後の課題

今年度の『赤ちゃん事業』について、保護者と小学生それぞれのアンケート分析結果を踏まえ、事業の成果と今後の展望を述べる。

まず、保護者アンケートの結果からは、約9割の保護者が本事業を佐世保市全域に拡大していくことを希望していることが明らかとなった。その理由として、小学生が赤ちゃんと直接ふれあうことへの意義を感じていることや小学生の学びや育ちへの貢献にもなると考えていること、自分の子育てや地域にとっての意味を感じていることがあげられている。少子化や核家族化、地域コミュニティの希薄化など、子育て世帯が、地域や他者と関わる機会が減少している昨今の日本社会においては、社会的なつながりが得られる貴重な機会ともなる本事業が、多面的な価値を発揮するものとなることが考えられる。今後も継続してこのような場を提供していく必要性が示唆された。

次に、小学生のアンケート調査結果からは、大きく二つのことが明らかとなった。一つ目に、赤ちゃんのイメージについてである。事業の前の小学生は赤ちゃんを未熟で能力が足りない存在として捉える傾向が強かったが、事業後にはそのようなイメージは薄れていた。また、事業前には学校の授業などで学習した知識に基づく回答が多かったのに対し、事業後には、赤ちゃんの重さやあたたかさ、柔らかさに関する回答や、赤ちゃんの気持ちを想像した回答が増加した。これらの結果は、赤ちゃんとの直接的なふれあいが、赤ちゃんの実態に即したイメージ形成に大きく寄与する可能性を示している。二つ目に、子育てのイメージについてである。小学生は子育てについて、事業の経験の有無に関わらず、赤ちゃんのお世話が大変なものだと捉えていた。しかし同時に、楽しいものであるという認識も持ち合わせており、子育ては大変な中に楽しさもあると考えている小学生がいることが分かった。詳しく見てみると、5年生は赤ちゃんのお世話の面、6年生は経済的な面や時間的な面で子育てを大変と捉えている傾向にあり、学年によって子育てのどのような側面に対して大変というイメージをもつかは異なるということが明らかとなった。さらに、6年生は事業で赤ちゃんやその保護者とふれあうことが、一生懸命に子育てをしているという親の気持ちに気付く機会にもなっていた。これらの結果から、小学生の発達段階によって、子育てに対する捉え方や印象が異なることが示唆されたといえる。以上、赤ちゃんのイメージ及び子育てのイメージの回答結果から、小学生にとって赤ちゃんとの直接的なふれあいは、生命の大切さ、尊さ、重さを実感する契機となるとともに、子育てへのイメージを深化させる重要な機会であったといえる。これは昨年度も同様の結果が出ており、『赤ちゃん事業』がその一義的な目的を着実に果たしているということが確認された。

最後に、本事業の今後の展望について述べる。本事業は、小学生にとっては、赤ちゃんとの直接的な関わりを通じて赤ちゃんや子育てに関するイメージが具体化・深化する契機、赤ちゃんとその保護者にとっては、地域社会とのつながりや自分たち親子の存在価値の再確認につながる経験となっていた。これらの結果は、これまでの調査でもほぼ同様の傾向が確認されており、これは本事業が小学生・赤ちゃん・保護者にとっての一貫した意義が認められているといえる。つまり、本事業は教育的・社会的意義を有する取り組みとして、さらに拡大していくことが望ましいと考えられる。このような安定した成果が継続的に得られていることは、幼児教育センター職員や小学校教員をはじめとする関係者、事業の企画・準備・実施・振り返りの各段階における、それぞれの高度な専門性と継続的な努力に依拠している。したがって、今後事業を拡大していくためには、これまで蓄積されてきた調査データを基に、事業実施に必要な要件を整理し、実施地域や担当者などの条件に左右されずに運用可能な状態を確立していくことが重要である。

<参考文献>

- 1) 佐藤郁哉(2008)「質的データ分析法—原理・方法・実践」新曜社
- 2) 樋口耕一(2014)「社会調査のための計量テキスト分析:内容分析の継承と発展を目指して」ナカニシヤ出版

(資料)令和7年『赤ちゃんふれあい(いのちを育む)事業』保護者アンケート項目

| 保護者【事業前】アンケート項目 | |
|-----------------|--|
| 問1 | ご自身の年齢・性別と、事業に参加されるお子さんの年齢・月齢・きょうだい数・第何子かについて教えてください。(選択肢) |
| 問2 | 小学生に対するイメージを自由にお書きください(自由記述回答) |
| 問3 | この事業に参加するのは、今回で何回目ですか？(選択肢) |
| 問4 | 日頃、小学生とふれあう機会がありますか？(選択肢) ふれあう機会があると答えた人は、具体的に教えてください。(自由記述回答) |
| 問5 | あなた自身は小学校や中学校の授業で小さい子ども(小学校入学前の子ども)とふれあう機会がありましたか？(選択肢) ふれあう機会があったと答えた人は、いつ、どこで、どんなことをして、どのように感じましたか？(自由記述回答) |
| 問6 | 赤ちゃん事業に参加しようと思った動機は何ですか？(選択肢) |
| 問7 | あなたは「子育て」に対してどのようなイメージを持っていますか？(自由記述回答) |
| 問8 | 現在、子育てをする中で楽しい・嬉しいと思うことはありますか？(選択肢) 楽しい・嬉しいと思う人は、それはどのような時ですか？(自由記述回答) |
| 問9 | 子育てに対して、不安や気になることがありますか？(選択肢) 不安や気になることがある人は、その内容を可能な範囲で具体的に教えてください。(自由記述回答) |

| 保護者【事業後】アンケート項目 | |
|-----------------|---|
| 問1 | 小学生に対するイメージを書いてください。(自由記述回答) |
| 問2 | ご自身にとって、この事業に参加してよかったですか？(選択肢) その理由も教えてください。(自由記述回答) |
| 問3 | ご自身の赤ちゃんにとって、この事業で小学生と交流することはよいことだと思われますか？(選択肢) その理由も教えてください。(自由記述回答) |
| 問4 | 小学生にとって、このような事業で赤ちゃんとふれあうことはよいことだと思われますか？(選択肢) その理由も教えてください。(自由記述回答) |
| 問5 | この事業に参加して、小学生に対するイメージが変化したところ・変化していないところについて教えてください(自由記述回答) |
| 問6 | この事業で小学生と交流して、ご自身に変化はありましたか？(選択肢) 変化した場合、どのようなところが変化しましたか？(自由記述回答) |
| 問7 | この事業に次回も参加したいと思われますか？(選択肢) その理由も教えてください。(自由記述回答) |
| 問8 | このように、赤ちゃんと小学生がふれあうような事業を、佐世保市全域に広げていった方がよいと思われますか？(選択肢) その理由も教えてください。(自由記述回答) |
| 問9 | 「赤ちゃんふれあい事業」に対してのご意見・ご要望などがありましたお書きください。(自由記述回答) |

(資料)令和7年『赤ちゃんふれあい(いのちを育む)事業』小学生【事業前】アンケート項目

| 小学生【事業前】アンケート項目 | |
|-----------------|--|
| 問1 | あなたの性別・きょうだい構成を教えてください。 |
| 問2 | 「赤ちゃん」と聞いて何を思い浮かべますか？思いっただけ書いてください。(自由記述回答) |
| 問3 | あなたは「子育て」にどのようなイメージがありますか？(自由記述回答) あなたの「子育て」についてのイメージは、何から影響をうけていると思いますか？(選択肢) |
| 問4 | これまでに赤ちゃんをさわったり、赤ちゃんとかかわったりする機会がありましたか？(選択肢) あると答えた人は、これまでどのような時に、どれくらい赤ちゃんとふれあう機会がありましたか？(選択肢) |
| 問5 | 赤ちゃんに会えるのは楽しみですか？(選択肢) その理由も教えてください。(自由記述回答) |
| 問6 | 赤ちゃんや赤ちゃんの保護者とふれあう時に、何か心配なことや気をつけたいことがありますか？(選択肢) |
| 問7 | 赤ちゃんや赤ちゃんの保護者と会ったら、何をしてみたいですか？(自由記述回答) |

令和7年『赤ちゃんふれあい(いのちを育む)事業』小学生【事業後】アンケート項目

| 小学生【事業後】アンケート項目 | |
|-----------------|---|
| 問1 | 「赤ちゃん」と聞いて、何を思いうかべますか？ 思いっただけ書いてください。(自由記述回答) |
| 問2 | あなたは「子育て」にどのようなイメージがありますか？ 具体的に教えてください。(自由記述回答) |
| 問3 | 赤ちゃんや赤ちゃんの保護者に会ってみて、あなたが感じたこと、考えたことを教えてください。(自由記述回答) |
| 問4 | 赤ちゃんはどんな様子でしたか？赤ちゃんの様子で気づいたことがあれば教えてください。(自由記述回答) |
| 問5 | 赤ちゃんとふれあうことができてよかったと思いますか？(選択肢) その理由も教えてください。(自由記述回答) |
| 問6 | あなたは赤ちゃんにさわったり、抱っこしたりしてふれあいましたか？(選択肢) ふれあった人は、何をしてふれあったか、ふれあって気付いたことを書いてください。(自由記述回答) ふれあっていない人は、今後赤ちゃんやふれあうとしたら何をしたいですか？(自由記述回答) |
| 問7 | あなたは赤ちゃんとかかわるときに、気を付けたことがありましたか？(自由記述回答) あると答えた人は、その内容を教えてください。(自由記述回答) |
| 問8 | 今回、赤ちゃんの保護者とお話した人は、お話しして良かったと思いますか。(選択肢) また、その理由も教えてください。(自由記述回答) お話しなかった人は、赤ちゃんの保護者とお話しをしてみたいと思いますか？(選択肢) その理由も教えてください。(自由記述回答) |
| 問9 | 今回のような「赤ちゃんや保護者とふれあう」機会があったら、また参加してみたいですか？(選択肢) その理由も教えてください。(自由記述回答) |